

仲野徹著「なかのとのおの生命科学者の伝記を読む」学研マーケティング 2011年12月20日発行  
を読む

## 生命科学者18名の伝記を読む

1. (1)本を読むのが好きである。なかでも伝記がたまらなく好きである。  
(2)日本の本屋さんには伝記のコーナーがあまり見当たらないが、アメリカでは、空港の本屋さんのような小さなお店にも伝記コーナーがあったりするので、けっこう人気があるようだ。  
(3)私などは典型であるが、他人の生活をちょっとのぞいてみたいという下世話好きな本能と  
いうのがあるのだろう。
2. (1)当然のことながら伝記はノンフィクションである。とはいうものの、科学者が考える尺度  
での「事実」や「真実」が書かれているかということ、そんなことはない。自伝には、都合の  
よいことだけが書かれていたり、適当な脚色のほどこされていることがよくある。他人の書  
いた伝記であっても、筆者の立ち位置によって内容が異なってしまうこともままある。  
(2)それでも伝記を読むのは楽しい。フィクションであればご都合主義的な筋とバカにされる  
ような信じられない幸運が本当に転がっていたり、これではあまりにひどすぎるのではない  
かというような厄災が実際に起こってしまうのが伝記である。  
(3)のぞき見趣味を満たすだけでなく、ああ、生きていこうということがあったりするのか、  
と、人生というものを真摯しんしに考えさせてくれる。
3. (1)生命科学者の伝記も、もちろん例外ではない。伝記になるような人たちなのであるから、  
卓越した業績をあげた人たちである。しかし、その成果にいたる道筋は大きく異なっている  
し、それぞれの生き様となるともっと振幅が大きい。  
(2)研究する日常というのはけっこう淡々としたものであって、巷間想像こうかんされているほどドラ  
マチックではない。  
(3)しかし、伝記になるような科学者の生き様を知り、人間らしい営みの物語としての研究を  
知るとするのは面白い。
4. (1)この本は『細胞工学』という生命科学の専門誌に 20 回にわたって連載し、ご愛読いただ  
いた伝記本の紹介を訂正、加筆してまとめたものである。  
(2)男女、東西、古今、できるだけ多彩に、しかし、必ず驚くような面白いエピソードを持っ  
た生命科学者たちの伝記を、まったく個人の興味で取り上げさせてもらった。  
(3)それぞれの伝記本を紹介し、その科学者のエピソードから思いつくことなどを妄想的にま  
とめるといふ、項目ごと読み切り形式の内容になっている。

5. (1) 取り上げた伝記本の内容は多岐にわたっており、専門知識が全くなくとも読めるものから、かなりの専門知識が必要なものまで幅広い。しかし、ほとんどは、専門的な話をすっとぼしても面白く読めるように書いたつもりである。
- (2) なんとなく興味があるというレベルからどっぷりひたっているというレベルまで、生命科学に関心のある人、生命科学研究者の人生をのぞいてみたい人、そして、なによりも将来生命学者になりたい人にぜひ読んでいただきたい。
- (3) そして、生命学者って面白いなあ、と読んでいただけたら望外の喜びである。

6. 本書に登場する生命学者

- (1) 野口英世
- (2) クレイグ・ベンター
- (3) アルバート・セント＝ジェルジ
- (4) ルドルフ・ウィルヒョウ
- (5) ジョン・ハンター
- (6) トーマス・ヤング
- (7) 森 林太郎(鷗外)
- (8) シーモア・ベンザー
- (9) アレキシス・カレル
- (10) オズワルド・エイブリー
- (11) サルバドール・ルリア
- (12) ロザリンド・フランクリン
- (13) 吉田富三
- (14) リタ・レーヴィ＝モンタルチーニ
- (15) マックス・デルブリュック
- (16) フランソワ・ジャコブ
- (17) ジャン・ドーセ
- (18) 北里柴三郎

P2 ~ P3

<コメント>

今日(6月1日)から学校が再開されたが、今ほど生命学者と生命科学に従事する専門家の教育の重要性を認識した時期はありません。一人でも多くの塾生にこの道の専門家になって頂くために、まずは我々が「伝記」を読み、その基礎を固めましょう。

2020年6月1日(月)